

短篇 獨逸教育話

仁壽堂主人

其三、兩人の對話

ごく晴朗な春の日の朝のことで御座いました私
が村の四ツ辻に立つてをりました、その右なる
小橋を渡れば直に學校へまいられました左の大
道は曲り曲つて原へ行かれます、そこで私が聞
ひてをりましたら二人の小兒がお互に話をして
をります

甲「勝ちやん今日ハ」

乙「負ちやん今日ハ」

甲「勝ちやん何處へ行くの」

乙「學校へ」

甲「エイ、何に、學校、いやなこと、けいこう

なんかして、まー原へいつて、こらんなさい

せい／＼していゝんです、いつしよに行つ

てあすばふじやありませんか勝ちやん」

乙「そんなら負ちやん晩にまた、私はこれから

學校へまいりますから 左様なら」

甲「どーでも勝手に勉強にれいでなさい私は遊

びにまいます 勝ちやん左様なら」

それから二十年たちまして同じ村の同じ處ろに私

しか立つてをりました其日は冬の寒ひ悪な日であ

りまして、わるい衣服をきた青ざめた人が學校の

門をたゝいてをりました活潑な威儀ある校長さん

が扉をわけました、そこで兩人の話を聞ひて居り

ましたら

子「先生 今日ハ」

丑「今日ハ あなた」

子「先生まことに申しかねましたが御願いたし

たいことが』

丑「ハ、ー、あなた、どんな御頼みなんですか」

子「先生おねかひと申すは實は私は學校の室々を掃除をし暖爐をたき其他いろ／＼な用事をいたしましたしよから、どーか御使ひ下されたい』

丑「ハ、ー、その外に何か仕事はできませんか」

子「できませんが、先生」

丑「ハ、ー、そりやまたどーしたわけですか」

子「ハイ、私ハいつこう學問をしませんでしたから」

丑「あなたはいつたい なんと云ふ御名前ですか」

子「負雄と申します』

丑「負雄さんですか、マ、ー、おはいりなさい、

そとは今日はひどくてたまりません學校内

の方がよほど結構なんです、そしてあなた

はどーかこれから勉強なさるがよろしふ

御座います』

と申しまして皆々内へはいりまして扉はしめられ

てしまいました其仕事をたのみにまいりましたも

のは其時まで親切な校長さんは誰ですか知らずに

かりましたのです、が、皆様は御存でしよ

一口ばなし

ある時、冬の寒い晩、主人が三助に向つて、

主「や、一三助今晚は、大層寒いでないか」

三「寒いって、旦那、私の精でありましねーよ」

主「これ／＼そんな挨拶の仕様はせぬものじゃ、人

が寒いといつたら、へーまことにお寒うござりま